
ワグナリアへようこそ

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワグナリアへようこそ

【Nコード】

N5201X

【作者名】

峰春秋人

【あらすじ】

WORKING第二期放送おめでとう！

つてことで、波に乗ってるアニメと同じく波に乗りたい僕です。

ワグナリアにやってきた新しい二人のバイト。

妃咲きようだい。

一人は長身で店長の彼氏と名乗る。

一人は小柄で店長の舎弟らしい。そして、相馬と面識あり？

厨房が三人の、フロアが・・・X人でワグナリア開店してます。
相馬が何故か小柄な舎弟をいじる。何故？
その理由は-。

作者、書いててわくわくしますw

一 品目（前書き）

フィクションです

一品目

「お腹空いちゃった……。」

ニット帽をかぶった小さな少年が店長に甘えるようにいった。

隣には佐藤さんより少し大きめの男がいてなんかいったような、いつてないような。

それより、少年の隙間から出る白っぽいハネっ毛がなんだか……。なんだか……。

「かわいい!」

「うるさい、黙れ。」

マグナリアに新しい従業員が増えました。

遡ること一時間前、彼はこのお店にやってきたんです。

「ご注文は?」

「コーヒー。砂糖とミルク多めで。」

「はい。」

ちよつと大きめの眼鏡がアンバランスで、此処に来るなり急にノートを開いて何かを書き始める。

それに、大人っぽいのにな似合わずコーヒーの甘めを頼むとは。

「不思議だ……。」

「どうしたの？かたなし君。」

「いや……。あの右端っこの席の男の人……。不思議だなんて。」

僕が視線を送った席を先輩はかわいらしく背伸びをしてみようとした。

見えたのか見えてないのか、足が疲れたのか疲れてないのか分からないけど、

「んー、そうかな？」

「はい。」

先輩はあきらめた。

「おい、早く料理運べ。」

「あ、佐藤さん。あそこの席の人怪しくないですか？」

「……。早くしろ。」

「は、はい。」

佐藤さんは全く反応せず、見ることもせずにキッチンの中に入っていく。

僕はそこの席の人を気にしつつも料理を持っていった。

「ねえ、佐藤君。」

「なんだ？」

「あの席の人……。どこかで見たことがあるんだけど……。」

「仕事しろ。」

僕が帰ってくると、何故か相馬さんまで佐藤さんに怒られていた。あ、コーヒ―。横にすごい量の砂糖とミルク。

お盆を持ってさっきの男のところへと行くこととするが、やっぱり気になる。

「お、お待たせいたしました。」

「。。。。」

男はさっきのノートに何かをひたすら書いていた。

思わずその文字を読んでしまいそうになる。が、やめておく。

「ご注文は以上でいいですか？」

伝票を伝票縦に入れようとすると、男は慌てた様子もなく口だけを動かした。

「あ、パフェ。お願いします。」

やっぱりこの人って甘党なのかな？

「何パフェにします？」

そう尋ねると男はノートから顔を上げてにっこりと笑った。

すこし、アンバランスな眼鏡がちよっとずれながらにっこりと。

「店長が食べてるパフェ。」

すごく寒気がして思わず、お盆を落としそうになる。

が、男がそつとそのお盆を掴んだ。そして、

「静かに、小鳥ちゃん。」

耳元でそう言われた。

寒気とともに変な冷や汗をかく。

誰か、誰か助けて！！

「離れてよ。兄さん。」

透き通った優しい声が舌のほうから聞こえてきた。

それと同時に僕と男の間になにか小さなものが……。

「えつと、お客さん？」

「ちよつと、どいてくれないかな？」

「兄さん、うるさい。」

席に座っていた男の座高寄り幾分が大きな子供が僕の間にいた。

黒色のニット帽をかぶっていて、ロングパーカーも着こんでいる。

その子供は少し怒ったような口調で「兄さん」と呼んだ男を睨む。

あー訳がわからない。

「えつと、とにかく、戻っていいですか？」

「待て、小鳥遊。」

「店長！」

店にお客さんがそんないないから思わず後ろにいた店長の名を叫んだ。

後ろを向いて気がつかなかったけど、後ろにいた不思議な男はばたばたと僕を押しつけて店長の前に慌てた様子でやってきた。そして、

「杏子！」

「ん、あ、朋秋？」
ともあき

「気がついてなかったのかよ・・・姐さん。」

呆れたような声で子供は言つと、呆れたように店長を見上げる。
そして、少し飛ばしていまに戻るわけなんです。

「杏子の元・彼氏の妃咲朋秋ひさきともあきって言います。まあ、よろしゅう。」

やっぱりでかい眼鏡が顔にアンバランス過ぎて印象に残る。
でも、陽気な人っぽくてニコニコと笑顔を張り付けて笑っている。

「杏子さんの元・彼氏？」

「もどきだ。」

「もどきって、杏子さんひどいです。」

「いいのいいの。いつものことだから。」

やっぱり笑っている。
怖い。

「で、こっちが・・・。」

「・・・・。」

「おい、名前くらい自分で言えよ。」

「・・・ねえ、姐さん。」

その子はお兄さんって言うってた朋秋さんの話は一切聞かずに、店長を見上げて一言いう。

「お腹空いちゃった・・・。」

か、か、

「かわいい!!」

「うるさい、黙れ。」

「な、なんでですか!?店長。」

「こいつは私の舎弟だ。手を出したら怒るぞ。」

店長の瞳がきつく僕を睨みつける。

ほ、本気だ・・・。

でも、可愛い。先輩と同じくらいかわいい。

「佐藤、オムライス。」

「うっす。」

スタッフルームにいた佐藤さんが部屋を出てキッチンへと戻っている。

それを見送って視線を戻すと、朋秋さんがいた。

「この人が小鳥ちゃんか。」

「っう!」

「どんなに綺麗なんやろな。」

「ぎゃあああ!!」

思わず部屋の隅へと逃げる。

これってセクハラ？

「兄さん、いい加減にしなよ。」

「えー、なんで？」

「小鳥遊さん、だっけ？気にしなくていいですよ。」

大人びた優しい声なのに、顔つきが矛盾してます！

そんなことも言えずにただ・・・僕は見とれてました。

「かたなし君、あの子私と同じくらい小さいよ！いくつなのかな？」

先輩が何故か好奇心旺盛にその子を見つめて、抑えられない衝動で思わず、

「あの、いくつなんですか！？小さいですね！！」

「っだ・・・先輩！」

「あ、あ、えと・・・その・・・。」

「・・・姐さん、あの生意気な餓鬼潰していい？」

目が店長にそっくりで、先輩がすごく怖がってる。
でも、そんな先輩も可愛い！

「やめておけ。ほれ、オムライス。」

佐藤さんが持ってきたアツアツのオムライスをみて純粹に喜ぶその子。

すごく、可愛くて・・・思わず・・・。

「ちょ、かたなし君何してるの！？」

伊波さんみたいに壁をこれでもかって殴りつける。
あ、以外に痛いなこれ……。

「あ、自己紹介が遅れました。」

遅れすぎだ！

ケチャップをかけて、オムライスを頼張る。

そして、ごっくんと音を立てるところを向く。

「姐さんの舎弟の妃咲千秋きさきちゅうです。ついでに言つとそこの変態と血が
つながってます。」

「ちょ、なんでついでなんや！」

本当にどうでもよさそうに朋秋さんを見るとまたもくもくとオムライスを食べ始めた。

「つーか、なんで此処にいるんだ？大阪で取材中じゃないのか？」

「あ、はい、これ、お土産。」

「お！」

朋秋さんはカバンの中から大きな箱を取り出して、店長へと差し出す。

店長の扱いになれているようで。

店長も喜んで箱を貰うと袋を雑にあけて中に入っていたお菓子を食べる。

「まあ、どうでもいいが。」

「ただお土産が欲しかっただけだよ。」

「うるさいぞ、小鳥遊。」

「はあ、僕仕事に戻りますね。」

そう言つて僕は千秋くんともう少し話したかったけど、スタッフルームからでて仕事を。

「あ、小鳥遊くん。もう休憩終わり？」

「はい。まだ、仕事ありますから。」

すれ違いぎわに相馬さんにあつた。

いつも通りの笑みで手を振るとそのままスタッフルームへ。

「うわあああああああああ！！！」

千秋さんの叫び声。ガタガタと音をたてた何か。

瞬時に足が方向回転してスタッフルームへと戻る。

さっきまで拒絶していた朋秋さんの後ろに隠れる千秋くん。そんな千秋くんを見てもなお笑顔な相馬さん。

すいません、状況が・・・。

「あ、千秋くん？」

「ひ、ろおみ・・・さん。」

顔面蒼白。そんな言葉が今の千秋くんにはお似合いだった。

「ど、どうしたんですか！？もしかして相馬さんにいじめられたんですか！？」

「ちょ、変な解釈しないでよ！」

「博臣さん・・・何してるんですか？」

オムライスそっちのけで、でも右手にはまだスプーンを持ってて・

・千秋くん大丈夫かな？

話を聞きたいけど、なんか、入りにくい・・・。

「なんでって、えっと、バイトしてるんだよね。」

「・・・そっすか。」

「どう？元気してた？」

「・・・姐さん、なんで言ってくれなかったのさ。」

「お前が聞かないから。」

店長相変わらずお土産食べてるし。

何が起きてるの？相馬さんと千秋くんって面識でもあったの？え、何それ・・・。

「姐さん、悪いけどこないだの話なしってことで。」

「何言ってる？もうシフト表も作ったぞ。」

そう言っただけで店長は砂糖のついた手で来月のシフト表を差し出した。奪い取るように千秋くんはシフト表を見ると、また顔面蒼白になる。

「姐さん・・・。」

「ん？」

「マジで・・・シフト立て直してください。」

「やだ。めんどうだ。」

涙目で千秋くんが相馬さんを見る。

あ、可愛いかもしれない・・・。

「僕、そ、相馬さんと同じ厨房に立つんですか・・・。」

「え、厨房？」

「明日からこいつらは此処でバイトするんだ。」

店長がコロツといいのける。

バイト、え、この妃咲兄弟が？

相馬さんに目をやるとすごい満面の笑みで、なんかむしろ怖いからの笑みでなんか言おうとしてる。

「あ、これからよろしゅう。」

空気が読めなさそうな朋秋さんが軽く会釈して、相馬さんも会釈して・・・。

「兄さん・・・。」

「ん？ほら、お前もあいさつしろよ。」

「久しぶりだね、千秋ちゃん。」

「千秋ちゃん？」

「ばっ、ひ、博臣！！」

急に千秋くんが相馬さんに向かって大声を上げる。

「ちゃん」って言ってたよね相馬さん。え、もしかして・・・。

「千秋くん・・・君もしかして・・・。」

「あ、言い忘れとったな。こいつ一応妹なんや。まあ、お手柔らかに。」

「ええええええええ！！」

これからワグナリアで何かが起こりそうです。

「これからよろしくね、千秋ちゃん。」

「・・・よ、ろしく。」

そして、これから厨房が少しだけにぎやかになりそうです。

「おい、千秋。俺は大丈夫か？」

佐藤さんふぁいと！

一品目（後書き）

妃咲を一発変換すると【膝木】でした。

一品目終了

二品目（前書き）

フィクションです

二品目

バイトにやってくるそく、厨房に小さな白衣を着た子がいました。

「あ、千秋くん。おはよう。」

軽やかに振り向いて千秋くんが相変わらず無表情で挨拶する。

「おはようございます。小鳥遊先輩。」

「あー、いい響きですね。」

「んと、白衣・・・少し大きいみたいで。」

話しをそらすかのように千秋くんが自分の白衣を見つめた。
たしかに、彼の体にしては大きなサイズだ。

「そうですね、袖のところならピンでとめちゃいましょうか。」

ちょうどポケットに入っていた星ピンを取りだす。

見るからに怪しげな眼で俺を見てくる千秋くん。慌てて否定した。

「ち、違うよ！こ、これは！」

「・・・まあ、いいや。止めてくれませんか？」

伸びた袖のところを出してお願いしてくる。

あ、やっぱり先輩と同じくらい可愛い。

袖を何回かおりこんで星ピンでとめてあげた。

千秋くんは何回か腕を振り回す。でも、ピンが外れてないのを確認するにつこりと満足げに口を釣り上げる。

「可愛い！」

「・・・小鳥遊先輩、僕が女ってことはあんまし出さないでください。」

「え、そうなの？」

「あんまし、好きじゃないんで。」

それだけ言つと千秋くんは仕込みをするからと言って世話なく支度を始めた。

なんで？って聞きたかったけど・・・やっぱり聞きにくいよね。

厨房を出ていくといつの間にか来ていた相馬さんが大きく伸びをしていた。

「あ、おはよう。小鳥遊くん。」

「あれ、今日は早いですね。相馬さん。」

「うん。新しい従業員に教えなきゃって思ってたね。」

すれ違い際にそう言われたけど。

そういえば・・・千秋ちゃんって・・・。

「わあああああああ！！！」

あ、やっぱり・・・。

失敗したと言わんばかりの顔で俺は厨房の出入り口を見ていた。

「ちょ、そんなに驚かないでよ！」

「営業時間まで近づかないでください！」

昨日のように相馬さんから逃げてきたかと思うと、朋秋さんの代わりに俺の後ろに隠れた。

そして、俺の洋服を力強く掴む。あ、ちょっといいかもしれない。相馬さんが回りこもうとすると俺を盾にして近づけさせない。

「もー、これじゃ教えられないよ。」

困ったように相馬さんが言ってるけど、本当にこの二人って何があったの!?

でも、なんとなくわからなくもないような。いや、やっぱりわからない。

「大丈夫です。姐さ・・・店長に全部教えられたんで。」

店長が厨房の仕事を!?

佐藤さんに聞いたほうがよかったんじゃないかな・・・。

「そっか、じゃ、料理の仕方とk - 「大丈夫です!」あれ、そっか、わかった。」

あきらめた様子で相馬さんが厨房へと戻っていく。

それを確認すると千秋ちゃんも洋服から手を離して盛大に溜息をついた。

ちよつと相馬さんがかわいそうだな。とか俺は思いつつも声をかける優先順位は千秋くんです。

「大丈夫ですか?」

「・・・うん。」

「相馬さんと何があったんですか?なんか少しかわいそうですよ。」

思わず聞いてしまった。それも相馬さんのフォーローを入れつつ。これから働いていく身としても聞いといたほうがいいよね?

「……博臣は僕の高校の先輩です。」

「あ、そうなんだ。」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

「ええええええええええ！」

「博臣といると傷つくんです。」

「案外傷つきやすいんだね。」

ちよつと涙目だったの言ってみたら、今にも泣きそうな顔になったので急いで話を切り替えた。

「と、とにかく、仕事中は佐藤さんに助けてもらいな。」

「俺がどうかしたか？」

気がついたら後ろに佐藤さんがいて驚いた。

あれ？その横には・・・

「おはよう、小鳥ちゃん。」

「ちょ、やめてください！その呼び方。」

「あれ？　そうなの？」

朝からほんわかかな笑みを浮かべてる朋秋さんがいた。

この人ってどこか相馬さんに似てる気が……しなくもないか。

「佐藤さん、千秋くんを助けてください！」

「……なんで？」

「あ、大丈夫です。小鳥遊先輩勝手なこと言わないでください。」

あれ？なんか急にきつい口調と視線で俺を睨む千秋くん。
もしかして、負けず嫌いなのかな？

でも、歩いていく千秋くんは両手両足一緒に出ていて、厨房に入るのをためらっていた。

「・・・はあ、わかった。ちょっと待ってる妃咲。」

「え、何？佐藤さん。」

「お前じゃねえーよ、朋秋。」

すでに呼び捨ての佐藤さんがすごい。

きつと朋秋さんって佐藤さんよりも全然年上だよな？だって、店長の彼氏もどきだし。32歳とか？

「僕は28歳だぞ。」

「え、ええええ！ちよ、聞こえてたんですか？」

「いや、なんとなくね。」

「てか、妹さんと結構離れてますね。」

耳打ちして言うとな朋秋さんはにっこりと笑い、そして、

「いいだろ！」

はい、うらやましいです！

「つて、違う！！」

「はははははは。」

ワグナリア開店です。

「いらつしゃいませ、何名様です・・・か・・・。」

「あ、伊波ちゃんいいよ!」

今日も種島さんに任せちゃった。

落ち込みながら私・伊波まひるは裏へと戻っていきます。

戻ると小鳥遊くんが食器を拭いていて、思わず、壁のところにかくれちゃった。

「また、駄目だったんですか?伊波さん。」

「だ、駄目じゃないよ!ちゃんと殴らないようにしたもん!」

やっぱり気がついてたんだ。

それにしても、言い方とかむかつく。

ムキになって私も答えを返してしまうけど。

「はあ、それじゃいつになっても治りませんよ。」

「え、なにになに?まひるちゃんって何か病氣持ちなの?」

急に現れた佐藤さんより巨人の男の人に驚いて、思わず、

「きゃあああああ!」

「あ、朋秋さん!!」

だ、駄目、こわすぎ・・・あれ?

「おっと、危ないよ。まひるちゃん。」

「え、え・・・。」

につこり笑うその人は手にお盆を持っていて、それを盾にして私のパンチから逃れていた。

でも、なんでお盆割れてないんだろう？

「だ、大丈夫ですか!？」

「うん、平気平気。」

「うそ、なんで、殴ったのに・・・。」

私が少し離れたところでそうつぶやくと朋秋さんって人はやっぱりにつこりとした顔を向ける。

「ふふ〜ん。ちょっと、宗太くん持ってみてよ。」

「え、あ、はい。」

そう言って軽くお盆を小鳥遊くんに渡す朋秋さん。

そして、朋秋さんがお盆から手を離れた瞬間 -

「のわああああ!!」

- ガンッ!

と鈍い音を立ててお盆が小鳥遊くんの手から落ちる。

普通のお盆と違う・・・。

「な、なんですか?これ。」

「20キ口のお盆。」

「なんでそんなものがあるんですか!」

「僕が特注で頼んじやった。普通のお盆だと軽すぎて・・・。」

軽く言つてのける朋秋さんは床に落ちたお盆を拾い上げる。
と、同時に呼び鈴がなった。

「あ、僕が行くよ。それじゃ。」

お盆で手を振るようにするとフロアに行ってしまった。

「伊波さん。」

「な、何？」

「絶対にあのお盆割らないでくださいね。」

「え、あ、うん。」

それって・・・どういうこと？

と、とにかく朋秋さんには注意しておこう。

「おい、小鳥遊。」

佐藤さんが厨房のそこから顔を出して小鳥遊くんに声をかける。

「なんですか？」

「その床の凹み、直しておけよ。」

「あ、」

よく見ると案外床が凹んでました。

昼休み、私がスタッフルームに行く途中で見知らぬ男の子が種島さんとかを話してた。

男の子のほうは少し種島さんより手一個分くらい大きくて、手にはちょうどジャガイモの入った段ボールをもっていた。そのまわりをうろちよるとする種島さん。

「ねえ、千秋くんは身長いくつ？」

「先輩よりでかいです。」

「何年生？」

「三年です。」

「え、中三ってバイトしていいの!？」

「……。」

種島さんの純粋な発言にいらだった様子で千秋くんって男の子は睨みつける。

そして、一回段ボールを床に置いて一息つく。

「あれ、どうしたの？」

「……高校三年生です。」

「え？」

「……高校三年生です。」

腰に手を当てて小さい子を叱るように言う千秋くんに種島さんは、何を言ってるのかわかってないみたい。

それにより一層イラついたのか千秋くんは種島さんのほっぺを軽く掴む。

「っわぁ!！」

「こ・う・こ・う・さ・ん・ね・ん・で・す! REPEAT AF

TER ME!!」

「こ、高校しゃんねんしえい。」

「はい、それじゃ、先輩は仕事にもどってください。」

「はい……。」

ちよつと懲りたように種島さんが静かに言う。

千秋くんは段ボールを再び持ち上げて厨房に戻ろうとする。が、途中で私のほうを見る。
びつくりして隠れたくなった。

「伊波先輩。種島先輩、お願いします。」

「え、あ、はい。」

「それじゃ。」

それだけ言つて本当に厨房に行つてしまった。
案外優しいのかもしれない。

「伊波ちゃん!」

「あ、種島さん。」

「千秋くんったらひどいんだよ!冗談で言っただけなのに……。」

涙目の種島さんが私に抱きついてくる。

でも、さっきのは確実に気がついてなかったよね? 種島さん。

「まあ、しょうがないよ。」

「んー……そうだね。」

あ、そんなんでもいいんだ。

「そろそろ、仕事もどろ。」

「あ、じゃ、私休憩だから。」
「うん、じゃーね!」

種島さんが無邪気に走って角を曲がろうとすると、朋秋さんが曲が
つてきてぶつかってしまふ。

けど、朋秋さん大きいから種島さんにぶつかったのにいたそうじゃ
なかった。

代わりに種島さん痛そうだったけど。

「ちよ、邪魔だよ! 巨人!!」

「ちよ、ひどいなー。ぽぷらちゃん。」

「兄弟なのに全然違うなあー。」

え、兄弟?

もしかして、

「そうだよ、千秋の兄です。」

私の心を読むように朋秋さんが返答してくる。思わず、

「えええええええ!!」

全然性格も、外見も違うから……。

「まひるちゃん、あいつのこともよろしくね。」

「あ、は、はい……。」

男の人の率が増えたことに私はがんばろうと、心に決めました。

「あ、大丈夫? まひるちゃん。」

「だ、大丈夫です。」

「伊波ちゃん！壁壊さないで！！」

「っう……。」

「どうした？千秋。」

「いや……。なんか寒気が。」

「そうか……。死ぬなよ。」

「なんで！？」

二品目（後書き）

伊波ちゃんの口調が迷子です。

【種島】が最初は【種志摩】でした。

あ、青エク書いてたからw

二品目完食。

三品目（前書き）

フィクションです

三品目

今日、バイトに来たら何故か女子更衣室に千秋くんがいました。

「え．．．。」

「あ、おはようございます。伊波さん。」

「え、あ、え、」

何が起きているのか分からない私に千秋くんはいつも通りにこたえる。

「気にしないでください。」

「え、あ、うん。」

そう言っただけ千秋くんは私が髪にしているようなピンを腕につけると女子更衣室を後にした。

え、あの、私どうしたらいいの？

そこへ種島さんがやってきて心配そうに私に尋ねる。

「どうしたの？伊波ちゃん。」

「いま、千秋くんが男子更衣室に．．．。」

恐る恐る言つと、種島さんは笑顔で答えた。

「きつと、千秋くんは女装してたんだよ！」

純粹にいつてる種島さんが急にかわいそうに思いました。

「え、ちょ、伊波ちゃん!？」

ワグナリア開店です。

おはようございます、山田です。

今日は山田の出勤日です。といつても出勤場所が我が家ですが。

「あ、葵ちゃんおはよう。」

「おはようございます。種島さん。」

今日も種島さんは小さいです。山田と同じです。

でも、種島さんの作る笑顔は可愛いです。山田も負けません。

「あ、そうだ。葵ちゃんが来ない間に新しいバイトの子来たんだよ。」

「え！そうなんですか！？完全に出遅れました。」

「大丈夫だよ！優しい人だったから。」

新しいバイトの人は一体どんな人なんでしょう？

山田少し楽しみです。山田の家族候補に入る人がいいです。

とりあえず、これで山田は研修バッチを取り外して「先輩」と呼ばれる日々が！！

それでこそ山田なのです。

「あ、ほら、千秋くん!!」

種島さんがちよつと背伸びをして手を振る向こうには、山田とそこまで身長の変わらない男の人がいました。

大きな荷物を持っていて、白髪のはねつ毛があつて、ちよつと釣り目っていうか無表情で……。

「種島さん、佐藤さんの身になにが!？」

「え？」

「俺じゃねえーよ。」

奥のスタッフルームで休憩していたらしい佐藤さんに後ろから殴られました。

でも、佐藤さんにそっくりです。髪の毛と身長以外。

「全然、似てないだろ。」

「あの、佐藤さん。」

「……おい、千秋。それ冷蔵庫に入れろっていつたる？」

佐藤さんが近づくとより一層、その人が小さく見えました。

ちよつと困った顔でその人は佐藤さんを見上げます。

そして、もう一回手に持っていた箱を見ると困ったように言います。

「いや、冷蔵庫に何故か納豆があつて……入らないんです。」

「……山田、どかせ。今すぐどかせ。」

さ、佐藤さんが怖いです。

思わず種島さんの後ろに隠れてしまいました。

すると、山田のほうにその人の視線がやってきました。

「・・・佐藤さん、あの子は？」

小さな声でその人が佐藤さんに聞くので、可愛い山田は直々にその人のそばにいつて名乗り上げました。

それがかつこよく、かわいい・・・かつこかわいく！

「山田の名前は山田です！フロア担当で、このバイトの中で一番の美人さんです。」

「・・・山田さん、あ、はい。覚えておきます。僕は妃咲千秋です。」

「千秋さん、わからないことがあつたら山田に聞いてください！」

「千秋、こいつが皿割つてるところみたら報告しろ。」

「っな！や、山田はもうお皿は割りません。」

佐藤さんの目がやっぱり怖いです。

でも、山田負けません。だって、今月はまだそこまでお皿は割ってないです。たかが、たかが、

「・・・山田さんって一か月に何枚割ってるんです？」

千秋さんが半ばあきれたような声で山田に、佐藤さんに聞く。

や、山田し、しりません。そっぽを向く山田に佐藤さんが現実を突き付けます。

「平均20枚。最高で30枚。」

けろつといいのける佐藤さんはひどいです。

でも、いじめられる山田も可愛いです。

千秋さんは少し眉を寄せた後、また無表情になって山田に言います。

「・・・そつか、なら、山田さん。」

「なんですか？千秋さん。って、先輩をつけてください！」

「あ、はい、山田先輩。」

「なんですか？」

ちよつと「先輩」という響きが良くてうれしくなります。

でも、千秋さんは先輩に対しては失礼なことを口にしました。

「お皿一枚につき今度から罰金しますね。」

「な、なんですって！！」

「それがいいな。おい、山田さつさと納豆どけろよ。」

そういうと二人はスタッフルームをあとにしました。

山田、先輩なのにどうしてそんなことを・・・。

ちよつと泣きそうになります。

「あ、葵ちゃん！大丈夫だよ。これから割らなきゃいいんだからね？」

「そうです。山田、絶対に割りません！」

そうです。山田、ドジっ子はもう卒業です。

皿を割って、「山田さん、可愛いかも。」なんて言われるのはもう卒業です。

「山田、仕事してきます！」

「うん、行こう行こう。」

今日の目標はお皿を一枚も割らないです！

山田、がんばります。

「山田あああー!!」

「っっっっ。」

山田、またやってしまいました。

仕事を始めて約30分で皿を割りました。

小鳥遊さんの怒声が山田の頭の中に響きます。

「山田、お前何回目だ?」

「ま、まだ一回目です。今月は・・・。」

「どうやったらそんなに割れるんだ!」

「ううう・・・。」

怖いです。

誰か助けてください。

「ちょ、小鳥ちゃん。あんまし怒ったらかわいそうだよ。」

あ、この声は女神様ですか!?

山田が振り向くとそこには女神じゃなく巨人兵がいました。それもとっても優しい巨人兵が。

「や、山田の味方です。」

「君が葵ちゃんね。僕はバイトの朋秋っていうんだ。よろしくね。」

「はい!山田のこともよろしくです。」

「ちょっと、朋秋さん。あんまし甘やかさないてください。」

巨人兵とおしゃべりしてたら、山田は悪者に捕まりました。まだ怒ってるみたいです。怖いです。

でも、朋秋さんは山田のことをちゃんと守ってくれます。

「んー、葵ちゃんは どうしてそんなに お皿割っちゃうのかな？」

「山田、がんばってるつもりです。お皿が勝手に割れるんです。」

「ウソつけ！」

「じゃ、僕がお皿やるから葵ちゃんは接客をたくさんする。それで
どうかな？」

朋秋さんは落ち着いていて、とても優しいです。

山田、惚れちゃいます。つは！でも、山田のお父さんは音尾さんだけです。

朋秋さんはお兄さんがいいです。

「わかりました、山田、元気が出ます！」

「でも、またお皿割らないでね。」

「はい！」

「じゃ、そろそろ休憩時間じゃない？」

「そうでした！休憩してきます。」

山田は半ばスキップでスタッフルームへと向かいます。

新しいバイトの一人はとても優しいということがわかりました。

朋秋さんは山田のお兄さん候補です。千秋さんはもっと山田が教育
したいと思います。

以上、今日の山田でした。

「朋秋さん、山田にそんなに甘くしないでください。今も休憩じゃなかったでしょ?」

「いや、いまお客さんそんなにいないから僕一人で平気だし。それに・・・。」

「それに?」

「これ以上お皿割られた、杏子がいつブチギレるやらわかったもんじゃないから。」

「あ、そ、そうですね。」

「・・・・。」

「どうした?千秋。」

「あの、納豆はいつどくんでしょうか?」

「・・・・はあ。」

この後山田はこっぴどく怒られました。

三品目（後書き）

本日英検準二級受けました。

【あい、きやんと、すぴーくいんぐりっしゅ】です。

山田の扱いに慣れました↑

三品目完食です

四品目（前書き）

フィクションです

四品目

またまた山田です。

「そろそろ、閉店時間だね。」

伊波さんがそう言い始めます。

フロアを見渡すと人はもういなくて、閉めるにはちょうどいい時間になっていました。

「さあ、切り上げるか。」

「そうですね、杏子さん。」

八千代さんたちもそそくさとスタッフルームへと消えて、支度を始めます。

「じゃ、キッチンも終わりだね。」

相馬さんもキッチンから出てきて帰りの支度をはじめます。
今日も一日が終わると思うと、山田悲しいです！

「あれ、葵ちゃんは帰らないの？」

そんな悲しそうだった山田に朋秋さんが声をかけてくれました。
やっぱり山田のお兄さんは優しいです。

「山田先輩は此处に住んでるからいいんだよ、兄さん。」

「兄さん？」

「あ、そうなん？なら、仕方ないか。じゃ、また明日ね。」

「朋秋さん。」

思わず山田は朋秋さんの洋服を掴みました。
そつとこちらを向くと朋秋さんは首をそつとかしげます。

「千秋さんと、兄弟なんですか？」

「あ、そうだよ。一応ね。」

「・・・っな！」

千秋さんが山田のもう一人のお兄さんになりました。
いや、おとうと。

「ほら、山田先輩。電気消しちゃいますよ。」

後ろから支度を終えた千秋さんが無表情で山田の頭に手を置きます。
でも、心のそこで千秋さんはきつと山田のことを・・・。

「この、可愛い女高く売れそうだな。」

なんてことを！！

「す、すいません。」

「・・・何が？」

「おやすみなさい。」

山田は認めません！

千秋さんは山田の家族じゃありません！！

「・・・俺、なんかしたかな？」

「葵ちゃんって面白い子だね。」

ワグナリア閉店です。

「あ、雨降ってる。」

一番最初に外に出た種島がそういう。

まだ中にいたみんなが少しあわてて傘を奥から出してくる。

「はい、佐藤くん。」

「おう。」

相馬が俺に傘を渡してきた。

ちよつと大きめの傘だったが、まあ、いいや。

「あ、どうしましょう・・・。」

「どうした？」

轟がすこしオロオロした様子で店から出ようとしない。

手に傘は持っているが、何かあったみたいだ。

店長が気になって轟に尋ねるとすこしうつむき加減で真実を述べる。

「傘、一本足りないみたい。」

「え、」

そこで驚きの言葉を述べたのは千秋だった。
店の電気を消して、忘れ物がなかったか確かめていて遅れて状況を理解したらしい。

轟の後ろから顔を出す千秋の手には確かに傘はなかった。
顔に現れる焦りと、少しの悲しみ。

「あ、じゃ、僕の傘に入る？」

相馬が俺の隣でふざけた様子で言う。

千秋の顔が一気に青くなって、相馬を睨みつける。

「絶対に嫌です。」

「はははは、冗談だって。」

「どうしようかしら・・・。」

轟が困った声をあげて店長のほうを向く。

俺は自分の傘が大きいことを思い出して千秋に近づく。

「おい、千秋。俺の傘に入れ。」

「え、いいんですか？」

いいんですか？って質問はおかしくないか？
まあ、いいか。

「ああ。」

「ありがとうございます。」

一例して千秋が俺の傘の中に入ろうとした。
が、朋秋が一つの疑問を投げた。

「あれ・・・でも、佐藤さんって家反対方向じゃないっけ？」

あ、そうだ・・・忘れてた。

「すまん。」

「いや、こっちこそ気がついてなかったし。」

「じゃ、やっぱり僕の傘に・・・遠慮します。」

相馬の二度目の名乗り出も無に帰して、千秋は朋秋の傘へとかけていく。

「兄さんの傘でいいや。」

「ちょ、肩のところ濡れるってば。」

「いいよ。ちよつとくらい。」

ちよつと小さな傘の中で兄弟のやり取りが始まる。

狭い傘の中で兄弟なのに遠慮をする千秋の肩が傘からはみ出て、濡れた。

それを気にして千秋の肩を傘に入れる朋秋。けど、今度は自分の肩が濡れる。

「佐藤くん、何してるの？」

「・・・いや、別に。」

兄弟同士、なんやかんやで仲がいいんだな。

そう思っていたら轟が俺のそばにやってきて耳打ちした。

「そっいえば佐藤くんって車で来てるんじゃない？」

「あ・・・。」

今日の俺はどこか少し抜けているようだ。
結局、傘を千秋に渡して俺は車に乗り込む。何故か相馬も乗ってくる。

車を発進させる前に俺はもう一度外を見た。

「ちょ、兄さん。肩のところ濡れてるよ。」

「あ、ほんとだ。」

「ハンカチで拭いて。」

「はいはい。」

さつき濡らした肩のところに小さなハンカチがおかれる。
ちゃんと気がついてたんだ。

「いいよねえー、兄弟愛つて。」

後部座席から相馬が乗り出してそういう。

「座つてろ。」

「いて……。」

相馬の頭を叩いて大人しく座らせる。

兄弟愛か……。

じゃ、なんで共働きなんてしてるんだ？

「佐藤くん、帰らないの？」

「……。」

「うわ！ちょ、は、早いつてー！！」

エンジンをかけて、思いっきりアクセルを踏み込む。

明日のために今日はもう寝よう。

「もー、なに怒ってるんだか。」

「怒ってない。むしろ。」

俺は機嫌がいい。

「あ、あのハンカチって……。」

「ん？」

「いや、種島さんのじゃない？」

「……。」

「ちょ、は、速いってば!!！」

四品目（後書き）

佐藤さんが少し書きにくい・・・。
小野Dのボイスが頭から離れません。

四品目完食

五品目（前書き）

フィクションです

五品目

「おはよー。」

ワグナリアの駐車場にいつものように車を置いたら、後ろから声をかけられて振り向く。

朋秋が手を振って走ってきていた。

反対の手に握られた傘が昨日のことを鮮明に思い出させる。

「よお、朋秋。」

「雨上がったみたいでよかったね。」

「そうだな。」

隣に千秋の姿はない。

俺が質問するよりも早く、朋秋は返事をしてくる。

「もう来てるよ。」

「そうか・・・。」

兄弟なのに別で行く理由がわからない。

まあ、俺も兄弟とかいたらそうなるんだろうな。

そう思いながら煙草をに火をつけ、勢いよく煙を吸った。

「あ、そうそう。佐藤君って八千代ちゃんのこと好き？」

「!？」

むせた。そして、朋秋を凝視した。

何故知ってるかは俺が一番よく知っていた。

相馬の顔が頭のいたるところに現れてケラケラと笑い声を上げる。

「・・・帰る。」

「え、ど、どうしたの!？」

「体調悪い、機嫌が悪い、めんどい。帰る。」

「ちよ、キッチンの人で足りないよ!」

「平気だ。じゃ・・・。」

俺は情けないが、怒りを止めることができなくて家路を戻る。

相馬が忙しそうに働く姿を思い浮かべながら車に乗り込む。

煙草を小さくかみつぶして灰皿へと放り込んだ。

そして、アクセルを強く踏み込んでその場を立ち去る。

「はぁ・・・。」

大きく車内で溜息をついた。

明日、相馬をぶっ潰そう。

「あ、店長。俺今日体調悪いんで行けないっす。」

「おお、分かった。じゃ、夕方にかい。」

店長に電話をしたら、そう言われた。

あの人は人の話を聞いているのか？

そう言わんばかりの無責任さだが、相馬に比べれば安いものだ。

が、俺はその時に思い出す。もう一人のキッチンにいる奴の私情を。

「あ、千秋。」

あいつと相馬を二人きりにしたら・・・。

「・・・やべえ。」

ワグナリア開店。

店長の携帯が男子更衣室を微かに通り越して聞こえてくる。
内容は「佐藤君が夕方から来る」ってこと。

「忙しくなりそうだな・・・。」

めんどくさそうにつぶやいたけど、千秋ちゃんと二人だけなのはまた面白いかな。

エプロンを巻いて俺は男子更衣室を後にした。

「おはよう、千秋ちゃん。」

キッチンでわざとそういうと千秋ちゃんは持っていた包丁を思わず落とす。

あ、そこまで脅かせちゃったかな？
慌てて声をかけてみた。

「だ、大丈夫？」

「平気で、す。」

「あ、そう？」

「・・・あの、佐藤さんは？」

何か恐ろしいものを見るような目で千秋ちゃんは俺にたずねる。
さっき店長の電話で聞いたことをそのまま言った。

「夕方に来るって。」

「・・・。」

その時の千秋ちゃんは魂が抜けたような顔をしていました。

「ちょ、千秋ちゃん。大丈夫？」

放心状態とっていいほどの千秋ちゃんはさっきから、ひたすらに
玉ねぎを切っていた。

「だ、大丈夫です・・・。」

「そんなにシヨック？佐藤君が来なくて。」

「・・・わかっていらっしやるのでは？」

不自然な敬語にちよつとだけ笑う。

「わからないから聞いてるんだよ。」

「・・・博臣といるのが嫌なだけだ。」

「はつきり言ってくれるね・・・。」

やっぱりそういうことだね。

一応後輩だつてことで関わりがあるけど、嫌われるようなことなかしたかな？

少し小首をかしげてみる。
すると、

「っ痛。」

小さな声が聞こえてそっちへと視線を向ける。

ドクドクと流れる赤いものが床で小さな池を作った。

「わあああああ！ちよ、洗わなきゃ！！」

俺が慌てて千秋ちゃんの手を掴む。
するとー。

「わああああああ！」

伊波さんみたいに拒絶反応を起こした千秋ちゃんが俺の手を振り払う。

でも、俺も少しそれに抵抗して暴れる千秋ちゃんを抑えようとしたが、かえってそれがやばかったみたい。

「ちよ、千秋ちゃん！」

「は、離せええ！」

「うわあ！」

体勢を崩した俺たちは、マンガみたいに、スローモーションで床に倒れた。

それもいい感じに千秋ちゃんを押し倒し、いい感じに佐藤君が入ってくる。

今日は厄日だね。きつと。

「ちょ、さ、佐藤君！これは事故だよ！！」

しれつとした、変態を見る目の佐藤君にがんばって否定の言葉を並べる。

「さ、とうさん・・・。」

「ちょ、千秋ちゃん。なんで泣いてるの！？」

血だらけの手に付着した玉ねぎのエキスが目に入ったらしい。
ぼろぼろと涙をこぼす千秋ちゃんを見て佐藤君はもつと誤解をする。

「お前、最悪だな。」

俺をつきとばした後に言われた佐藤君の言葉。

そこにやってきた山田さんと、種島さんと、小鳥遊くん。

「ちょ、相馬さん。何してるの！！」

「山田もしてほしいです！」

「ちょ、千秋くんがあああああ！」

「え、ち、違うから！！」

それから三日間、俺はみんなに口をきいてもらえませんでした。

「朋秋さん、妹さんが襲われたのによく平気で・・・。」

「え、だって、なんやかんやで僕が悪いし。」

「え、なんですかそれ!？」
「んー、また次回の話だね。」

五品目（後書き）

次回は、千秋が相馬を嫌う理由その1？的なW

六品目（前書き）

フィクションデス

六品目

鳥のさえずり、朝の木漏れ日。

いつも通りの朝に俺は何を思うでもなく布団から出る。

通う学校の制服を引っ張り出して、少し名残惜しそうに見つめた。

「今日で、この制服ともお別れだね。」

そこまで悲しくないけど、着なくなる制服は結構着こんだ跡がある。袖のそこは少し擦り切れていたりすると一年生の時を思い出す。

「博臣、早くしなさい。」

「はい。」

これは俺、相馬博臣高校3年生の卒業式のお話。

「いってきます。」

ワグナリア閉店。

「へっくしゅん。」

星がやけに綺麗に見える今日、俺は家路をたどる。

兄さんは姐さんと飲みに行ったらしく今日は一人で帰った。
なんやかんや、今日はさんざんだった気がする。

「はぁ、博臣平気かな？」

ちよつと博臣のことを気にする。

一応俺が悪いし、手当てをしようとしていただけなのに・・・。

「昔は平気だったのに・・・。」

星をみながら俺ポツリとつぶやく。

卒業式、あの日まで俺は博臣のことを尊敬できる先輩だと言ってた。

- 卒業式 -

「先輩、卒業おめでとうございます。」

胸に花をつける担当だった千秋ちゃんは、俺の胸元に小さなお花をつけてくれる時小さくそう言った。

恥ずかしがり屋だった彼女が言ってくれた言葉がうれしくて笑う。

「ありがとう。」

ほんのりと千秋ちゃんの目が赤いのに気がついたけど、気のせいかな？

卒業証書授与で壇上に上がる俺は何故か千秋ちゃんを壇上で見つけ

た。

歌を歌ってる時も見つけた。退場の時も見つけた。きつとあっちも気が付いていたと思う。

「卒業おめでとう。」

最後のHRで先生が話す中、何人かが泣き始める中俺は外で準備をする後輩たちを見ていた。

部活の先輩のためのプレゼントとか持っている子がちらほら見える。その中にやっぱり千秋ちゃんを見つけた。

目をしきりにこすつてるところから見ると、やっぱり、泣いてくれるのかな？

「みんな、卒業おめでとう！」

最後に先生がそう言って拍手が起きた。同じような拍手を外で聞く。

「先輩、おめでとう！」

まわりでそういった声が聞こえてくる。

俺はまっさきに千秋ちゃんを捜した。

でも、今度は見当たらなかった。

「あ、相馬くん。卒業おめでとう。」

朋秋さんが俺のそばに来て花束を渡してくれる。

「千秋ちゃん、みませんでした？」

「あ、千秋なら今取り込み中やで。」

意味ありげな含み笑い。

目線が自然に体育館裏へと移動する。

気がついたときにはその脚は動いていた。

卒業式、ちらちらとこちらを見てくる博臣。
結構俺も気になったりはしていた。

「妃咲、ちょっといいか？」

先輩たちの見送りの時に軽音部の先輩に呼ばれた。
予想はしていた。ベタだってそう思った。

「いいですよ。」

体育館裏へと足が動く。

「好きだ。」

ベタだ。

「・・・そうですか。」

はつきり言われないと俺はわからないタイプだ。

「付き合ってくれ。」

「すいません、今はそういうのは……。」

「好きな人でもいるの？」

「……はい。」

いるようで、いない。

曖昧な気持ちだ。

体育館裏からすぐに離れ校庭に戻ると、先輩たちは結構まばらにいて博臣を見つけるのは困難と見えた。
なのに、兄さんはすぐに見つけた。

「あ、千秋。おかえり。」

「博臣は？」

「んー、帰ったよ。」

「はあ!？」

あっちが待っていてくれ。祝ってくれ。
そう言っていたのに帰るって……え、どういことだよ？

「なんで？」

「複雑だね。」

「はあ？」

「相馬くんはさ。」

「……って言っておいてください。」

「ええの？自分で言わないで。」

体育館裏から戻った俺はそう言った。

何を言ったのかは思い出したくない。

ただ縦に首を振って、すぐにそこを立ち去った。

「複雑やな。」

朋秋さんがそうつぶやいた時、千秋ちゃんは戻ってきたらしい。

俺が兄さんから聞いたことが真実か知らないけど、俺の気持ちは曖昧なものじゃなくなった。

確かなものになった。

けど、遅いってそう思ったから、だから、

「ちょ、千秋。何してるの！？」

髪をバツサリと切り落とした。

そのころから精神状態に問題を起こし、髪の毛はすっかり色素を失う。

博臣の言葉に気がつかない自分にここまで振り回される。それが嫌

だった。

だから、だからこそ俺は博臣を――

「相馬さん、どうしたんですか？」

「え、あ、ううん。」

山田さんの声で我に返る。

時計の針が目に入り、急いで外へと飛び出した。

飛び出した俺の前には星空が広がっている。綺麗だった。

「それじゃ、お疲れ様です。」

「おい、相馬。乗らないのか？」

佐藤くんの声が少し遠く感じる。
星空から目が離せない。

「千秋ちゃんも見てるかな？」

「嫌いだ。」

星空を見てそう思った。

何故、卒業式のことを思い出したのかってすごくイライラして仕方ない。

けど、これが確かなー。

「これが、確かなー。」

千秋ちゃんへの、

博臣への

- 思いかもしれない

「よし、これでいいかな？」

「あ、何してるんですか？ 朋秋さん。」

珍しく眼鏡をかけていた僕にぽらちゃんが声をかける。
につこりと笑うだけで、答えは教えてあげない。
教えたらきつと僕が、

「殺されちゃうから、駄目。」

「え？」

「朋秋。」

「あ、佐藤さん。」

キッチンから顔出して佐藤さんが声をかけてくる。
そっとパソコンのエンターキーを押してから返事をした。

小さなため息とともに佐藤さんが見透かしたように言う。

「千秋と相馬を妄想でくつつけるな。」

「え、そ、そんなことしてたの!？」

「しー、結構評判いいから。見ていいよ。」

ちよつと自慢げにぱらちゃんに見してあげる。

だって、千秋が相馬くんを拒絶する理由を作ったの僕だし。
この際いいかなって。

さてさて、続編も楽しみだな。

「へっくしゅん。」

「だ、大丈夫？千秋くん。」

「え、ええ。ちよつと寒気が……。」

「へっきゅしょん。」

「大丈夫ですか？相馬さん。」

「う、うん……。なんか嫌な予感が……。」

六品目（後書き）

ワグナリアは恋愛禁止。

そんなベタな関係じゃない、と思いますw
六品目完食です。

七品目（前書き）

フィクションです

七品目

PCを開いて、サイトを開く。
いつもアクセス解析をみては大きくため息をつく。
だって、

「ランキングおちてる・・・。」

そう、今現在お金の足りない僕はブロガーとしておおことを書くことはできない。

いつもは旅の記録とか、おいしい食事とか、オールジャンルを書いてるんだけど・・・。

「しまった、ネタがなさすぎる。」

途方に暮れる頃ごろ。

だって、なかなか相馬さんと妹がくつついてくれないから。

「何してるんですか？朋秋さん。」

「あ、相馬くん。」

荷物を持って現れた相馬くん。

からまずにはいられないのが僕なんです。

「ねえ、相馬くん。」

「はい？」

「千秋の好きな人知ってる？」

「え、知らないですよ。」

少しうれしそうな顔をする相馬くんは僕は小さく耳打ちをして教えてあげる。

「君だよ、相馬くん。」

「え、」

ちよつと驚きを隠せない相馬くんは荷物をおとしそうになるが、笑いながらそれを覆す。

「で、でも、あんなに嫌がられてるのに・・・ねえ？」

「そうかな？それも好きだからこそじゃない？」

「・・・それは、ないですよ。」

「じゃ、なんで相馬くんだけ博臣なの？嫌なら呼ばないでしょ。」

その言葉に少しだけ揺らぐ相馬くん。

「か、確認します。」

「うん、がんばって。」

ちよつとだけ青ざめた様子で相馬くんはキッチンへと向かって行った。

さてと、

「いい記事が書けそうだ。」

ワグナリア開店。

あんなことを兄さんが言ってるのを聞いた。

「つたく、最悪だ。」

止めなかった理由は博臣があんなみえみえな嘘に引っかかると思わなかったから。

だから、いつものようにキッチンへと戻っていった。

「おはようございます。」

「あ、お、おはよう。」

博臣が俺をみるといつもと違ってぎこちなく返事をする。
これも演技。そう感じた。てか、信じた。

「ねえ、千秋ちゃん。」

俺が冷蔵庫の中を整理しようとしてドアを開けようとしたら、博臣が声を掛けてきた。

少し驚いて後ろへと下がる。

「千秋ちゃんって好きな人いる？」

「・・・なんでですか？」

あれ？これって演技だよな？

ちよつと心配になる俺にどんどん博臣が近づいてくる。
後ろに下がってたら、壁がそれを止めてしまった。

「ねえ、いる？」

「ちよ、博臣！？」

「どうなの？」

詰め寄った博臣に顔が本気だったから、すごくすごく怖くなった。

「ねえ、どうなの！？」

「・・・えっと。」

あたりをきよるきよると見渡していると、入口付近で小鳥遊先輩と佐藤先輩がこつちを見ているのを見つけた。笑ってる。確実にふたりともわらってる。

「えっと、俺は・・・。」

「・・・だれなの？」

「た、小鳥遊先輩がすきです！！」

あー、言ってしまった。

てか、これなら絶対にいいだろ！

「・・・そ、そうだったの？」

なぜか小鳥遊先輩が隠れるのをやめて眼をランランと輝かせた。
ちよ、う、ウソだろ？

「ぼ、僕もです！！」

「だああああああ！！」

俺は急いでその場から逃げた。

そして、佐藤さんを盾に小鳥遊先輩から逃げた。
つか・・・

「か、帰る！」

あーもうめんどい！

ワグナリアなんか！！！！

「・・・何してた？相馬。」

「え、千秋ちゃんいじめ。」

「・・・はあ。」

七品目（後書き）

ネタが結構ないですね
↑

七品目終了

八品目（前書き）

フィクションです

八品目

バイトを始めてもう一カ月が経つ。
そろそろキッチンにも慣れてきたところだけど・・・。

「・・・あの、佐藤さん。」

「ん、どうした？」

冷蔵庫を開けるたびにいつも思ってしまう。
何故、ワグナリアには、

「食材がこんなにも減るんですか？」

「・・・店長に聞いてくれ。」

ちよつと佐藤さんも呆れた口調で言うつと再び手を動かし始めた。
同時にやってきた姐さんに俺は話掛ける。
そつとそつと。

「あの、姐さん。」

「どうした？何かあったのか？」

「姐さん、よくパフェ食べてますけど・・・どこからとってますか？」

「八千代だ。」

轟さんのことか。

俺はそつとフロアのほうへと視線を向け。

あの人は一か月の中で一番接してないかもしれない人だ。
だって、あの腰のものなんですか！？

「あ、杏子さん。」

いつも姐さんのことを呼んでやってくると嬉しそうにする。
きつと好きなんだろうけど、なんだろう・・・すごくもやもやした
気持ちが・・・。

「あら、どうしたの？千秋くん。」

「え、いや・・・なんでもないです。」

即座に視線をそらして仕事に戻る。

けど、体を元に戻して轟さんに視線を戻す。
そして、

「あの、食材・・・勝手に使っちゃうと困るので控えてください。」

言った。

俺は言っただよ。

「おい、千秋。お前どこ見て言っただよ。」

佐藤さんが俺の頭を軽くたたく。

え、あ、俺ずっと刀見て話してた・・・。

「あら、そうなの？わかったわ。」

「お、お願いします。」

「じゃ、今度から千秋くんに言ってから使っわね。」

轟さんがそう言って去っていく。

一見すればいいと思うけど・・・え、ちょっと待って、それでも食
材を使っって・・・。

「ちょ、あ、轟さん！」

って言った時にはもういなかったんだけど。

「千秋、頑張ったな。」

「・・・はあ。」

佐藤さんが慰めてたけど、いや、もう無理です。

「おい、八千代。パフェ。」

ワグナリア開店です。

最近のコミュニティサイトって面白いね。

「なう。」

なんてつぶやいたただけですぐにコメントがやってくる。
とくにこのユーザーさんは。

「休憩なう。」

「お疲れ様。」

俺がこのコミュを始めてからすぐにできたユーザーの「オナモミち

やん」。

予想的に言つとすごくきれいで、清楚で、優しい女の子。あと黒髪のロングなんだろうな。

「はあ、いいねえ。」

「あ、相馬さんがなんだか怪しいです！」

山田さんがスタッフルームへと入ってきて俺の携帯をのぞこうとした。

だから、すぐさま携帯を閉じていつも通りの対応をとる。

「や、やあ、山田さん。怪しいなんて失礼じゃないかな？」

「え、そうですね？でも、本当に怪しかったですよ！今まさに女の子にデレデレしてたような・・・。」

「つつ、な、なんで？」

山田さんって少し感が強いのかな？

怖いな・・・。

まあ、そんなことはさておき話をそらそうと俺は明るい声を出す。

「山田さんは何しにきたの？」

「山田は、山田のお兄さん候補の朋秋さんを探しているんです。」

お兄さん候補って・・・山田さんの家族構成はどうなってるんだろう？

「朋秋さんならまだ来ないと思うよ。」

「そ、そうなんですか！？残念です。」

「そうだね。まあ、待つ間仕事でもしてなよ。」

「はい！山田、朋秋さんに褒められるためにがんばります。」

そう言つて山田さんは部屋を後にする。と入れ替わりに千秋ちゃんが部屋に入ってきて何事もないように向かいの席に座った。いつもなら拒絶とかするのに・・・どうしたんだろう？

手には愛用の携帯。必死に文字を打つてみたいんだけど、相変わらず機械は苦手みたいだね。

「・・・何見てるんです？」

「いや、打つの遅いね。つて思っただけ。」

「・・・余計なお世話です。」

やっぱそうですよね？

千秋ちゃんが不機嫌になったところで、つぶやきのほうに新展開があつたみたい。

「バイトそろそろ終わりです。」

「あ、おつかれ。」

「そっちは休憩まだですか？」

「うん、もう少しあるよ。」

「この後もがんばってくださいね。」

「はい。あ、そうだ。オナモミさんって俺のことどう思う？」

テンポの良いうちに聞いてみた。

こういうのって送ったあとが一番つらいんだよね。早く帰ってくるか、遅く帰ってくるかでちがうからね。でも、オナモミちゃんは結構速かった。

「優しい人で物知り。すごい頼りがいがあるとも思ってますよ。」

結構うれしい答えに手が進む。

「もしよかつたら電話しない？」

「え、電話ですか？」

「うん、わざわざコミュで話すんじゃないくて・・・どう？」

これもこれで積極的に攻めてみたけど、引かれるかな？

ドキドキ感を押さえながらも返事を待っている間に千秋ちゃんが席を立ちあがって、更衣室へと行ってしまふ。

え、なにも声をかけないってさみしくない？まあ、いつか。

きつと怒ってるんだろうな・・・。

「いいですよ、じゃ、此処に連絡ください。」

添付された電話番号に胸が高鳴る。

好きとかそういうのじゃなくても緊張するから、あー、どうしよう・・・。

自分から誘っておいてなんかオロオロする自分が情けない。
でも、思い切って！

・プルルルr

・プルルルルルr

ツコール鳴ったけどでない。

携帯手で持つてるんじゃないのかな？

それともぶざけてやっただけなの？いや、そんな子じゃないよね？

・ぶるるr

・がちゃ

「あ、お、オナモミさん!？」

やっと出てくれた。

これで、声が、オナモミさんの声がー。

「相馬さん、山田ですノ」

「え？お、オナモミさん？」

「山田は山田です。オナモミじゃないです。」

意味がわからない。

ただ、頭の中が真っ白になって……。

「あれ？相馬さん、相馬さん！」

携帯の奥で山田さんという名のオナモミちゃんがしゃべってる。
俺の黒髪で清楚な女の子は……。いずこに……。

「ちょ、そ、相馬くん!？」

「いいよ、兄さん。放置放置。」

「……何したの？」

「……シヨックだ、コミュで仲良しだった人が博臣だったなんて。」

「え、そうなの？」

「……もう、コミュはやめよう。」

次の日、コミュに行ってもオナモミちゃんはいなかった。
やっぱり、山田さんなのかな？

「山田、オナモミです。」

「そっか、よかったですね。山田先輩。」

「今度からはオナモミ先輩と呼んでください！」

「わかりました、オナモミ先輩。」

八品目（後書き）

コミュってたまにそうだよね。
うん、きつとそう

九品目（前書き）

フィクションです

九品目

冬です。

そして、僕は受験生です。

「あ、おはよう！千秋くん。」

「おはようございます。種島先輩。」

バイト開始30分前からスタッフルームで勉強を始めた僕を、横目に更衣室へと行く種島先輩。

そっうえば・・・あの人は高校二年生だっけか。

「何してるんですか？」

山田先輩が僕の横からテキストをのぞきみる。
なんかいやだから右手で隠してやった。

「な、なんで隠すんですか!？」

「・・・なんとなくです。」

「んあ!？」

「こら！葵ちゃんをいじめちゃだめだよ!」

さっさと着替えてきた種島先輩が元気いっぱい怒る。
これだときりがなから勉強を再開した。

「な、なんですかこれは!？」

「英語だね。」

「何て読むんですか？」

「えっと・・・あい、ぶれい・・・とげっとはー？」

片言なしかも間違いの英語をあたかも上手な人のように読み上げる。ちよつとだけ溜息をついてから、テキストの英文を読み上げた。

「I play together with a boyfriend
end on the day of Christmas .」

「え、どういう意味ですか？」

「クリスマスの日に私は彼氏と一緒に遊びます。」

「わあ！山田もそれがいいです！！」

わーきゃーと騒ぎ始める二人。

うるさくて勉強なんてできやしない。

「先輩、何してるんですか？」

「あ、かたなくん！」

「僕が受験なので英語の勉強してました。」

学校帰りの小鳥遊先輩が種島先輩の頭をなでる。

「英語です。」

「え、英語先行してるの？」

「・・・まあ、そんな感じです。」

「ふーん。で、先輩は彼氏がどうか・・・。」

お父さんの気持ちの小鳥遊先輩はおそろおそろたずねる。

「クリスマスに彼氏と入れたら楽しいよね。」

「はい！僕は先輩と入れたら一番楽しいです！！」

「小鳥遊先輩、危ない発言ですよ。それ。」

きらきら輝く瞳にむかつて僕はツツコミを入れる。
けど、小鳥遊先輩はにっこり笑う。

「僕は千秋くんでもいいよ！」

「いや、ノーセンキュー。」

「じゃ、俺と過ごそうか。」

さわやかな声とともに肩に添えられた手。
それをたどって手の持ち主へと目をやる。そして、

「うわあああああああー！」

伊波先輩のように大声をあげてTEXTを持ち主・博臣へと勢いよく叩きつける。

後は駆け足で逃げるのみ。

「いてててて。」

「変態だ。」

「変態。」

「山田です。」

ワグナリア開店。

私、種島ぼらです！

ポプラの木のように大きくなるように・・・って知ってるよね？

「いらっしやいませ。」

最近自動ドアが開くたびに冷風が入ってくるから、ほとんどはかたなくんか朋秋さん任せ。

だって、すごく寒いんだよ！

けど、コーヒーとかあったかいものを運ぶのは絶対にやる。

だって、あったかいもん！

けどね、あったかいといえば・・・。

「はあ、やっぱり・・・朋秋さんが一番いいや。」

「そう言ってくれるとありがたいな。」

朋秋さんの大きな手の中が一番あったかいんだ。
なんかこう熱がこもってるからいいんだろうね。

「あ、葵ちゃん。こつちおいでよ！あったかいよ。」

「あ、山田の第一のお兄さん。」

「葵ちゃん、朋秋って呼んでね。」

「はい、朋秋さん！」

葵ちゃんもこつちに駆け寄ってきて朋秋さんの手を握る。

「あれ、何してるんですか？」

「小鳥ちゃんもどう？」

お盆にたくさんの食器を乗せてかたなくんが帰ってきた。
小鳥ちゃんって言葉にやっぱりかたなくんはいいイメージはない

ようで、不機嫌な顔で首を振る。

「いいえ、遠慮しておきます。」

「おい、何してんだ？朋秋。」

「あ、杏子！あったかいよ！くる？」

朋秋さんがうれしそうに杏子さんに向かって言う。

けど、杏子さんは特に何をするわけでもなく無表情のまま

「はやく仕事しろ。」

そう言っ行ってしまふ。

や、やっぱり杏子さんらしいな。

「そんな、杏子も好きだ。」

「休憩入りまーす。」

今日は早めに休憩入っちゃおう。

スタッフルームで休憩してる千秋くんがストープをつけてるはず。

「え、寒ッ！」

「あ、種島先輩。お疲れ様です。」

机の上でTEXTとノートを広げてひたすら勉強していた千秋くん。

寒い部屋で上着も着ないで・・・。

「何してるの!？」

「・・・勉強です。」

「いや、そうじゃなくて・・・なんでストーブつけてないの？」

私がストーブを指差すと問題が解けたような顔をする。

「暖かいと眠くなるからです。」

「でも、きつと手とか冷たいでしょ？」

そう言って私は千秋くんの左手をぎゅっと握った。
芯から冷たくなるほど冷え切っていてこっちまでつめたくなっちゃ
う。

「うひゃああ!やっぱり、冷たいよ。」

「いつもですから。」

「ねえ、ストーブ付けようよ。」

「節電ですから駄目です。」

「手が冷たいから、心も冷たいんだ!」

文句を言う私に千秋くんは何も言ってくれない。

「冷たい冷たい!！」

「何してるんだ?種島。」

ジャガイモを取りに来た佐藤さんがからの段ボールを片手にやって
きた。

私は少しふくれっ面で佐藤さんに抗議する。

「佐藤さん、千秋くん冷たいんだよ！」

「そうなのか？」

「だって、ストーブをつけさせてくれないほど冷たい人なんだよ！手だって冷たいし。」

佐藤さんは無表情のまま思いついたように口に出す。

「種島、知ってるか？手が冷たい奴は心が暖かいんだぞ。」

「え、そうなの？でも、千秋くんは・・・。」

「千秋がストーブをつけないのは、お前がストーブに依存しないためでもあるんだぞ。」

「そ、そうなの！？」

ぜ、全然知らなかった。

そっか。私暖かいの好きだものね。それに依存しないようにさりげなく気を使ってくれてるんだ。

「そっか、そっか！」

「だろ？だから、冷たい奴じゃないんだ。」

「ごめんね、千秋くん。」

「いや、大丈夫ですよ。種島先輩。」

そついうとちよつとだけ千秋くんは笑ってくれた。

佐藤さんはジャガイモを取ると素早くスタッフルームを後にする。入れ違いに朋秋さんが入ってきた。

「あ、朋秋さん。」

「ん？どうかした？また、温めようか？」

「・・・冷たい人なんですね。」

「え？」

「つぶ。」

「ちょ、なんで千秋笑ってるの!？」

千秋くんは優しく、朋秋さんは冷たいってことがよくわかった。
今日はいろいろ学べたな。

「え、ちょ・・・千秋!？」

「兄さん、冷たいな。」

「冷たいな。」

「冷たいな。」

「ちょ、佐藤さんも杏子も!？」

九品目（後書き）

よくこういうのありますよね。
僕は。。。つ、冷たい人じゃないですよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5201x/>

ワグナリアへようこそ

2011年11月27日19時52分発行